三原ゆかりの芸術家特集

今月、三原ゆかりの芸術家の作品がまちを鮮やかに彩ります。文楽の代表的な劇作家 並木宗輔と、孤高の画人と呼ばれた秦森康屯さん。今月号では、三原が生んだ芸術家の中でも、この二人にスポットを当て、皆さんを薫り高い文化芸術の世界に案内します。

日本の伝統芸能である文楽。その発展に大きく貢献した、三原ゆかりの作家がいたことを皆さんは知っていますか。並木宗輔（なみきそうすけ）―。江戸時代中期、備後三原（現：三原市）の僧侶だった並木宗輔は、その後、文楽の脚本である浄瑠璃の作家として大活躍しました。29日（土）、その代表作「仮名手本忠臣蔵（かなでほんちゅうしんぐら）」が芸術文化センター ポポロで上演されます。並木宗輔の軌跡をたどりながら、文楽の魅力を紹介します。

世界的に評価される文楽

文楽は日本の伝統的な人形芝居で、その成り立ちは江戸時代初期にまでさかのぼります。物語の語り手である太夫（たゆう）、三味線、人形の三者が一体となって表現する舞台芸術で、人形浄瑠璃とも呼ばれています。平成15年にはユネスコから無形遺産の傑作宣言を受けるなど、その芸術性は世界でも高く評価されています。

文楽の黄金時代を築いた三原ゆかりの 並木宗輔

並木宗輔は青年時代、本町の禅寺 成就寺（じょうじゅじ）で「断継（だんけい）」の名前で修行していました。30歳ごろ、僧侶を辞め、大阪で浄瑠璃作家に転身。躍進、人気作家となりました。精力的に創作活動を行い、57歳で亡くなるまでに約50作の浄瑠璃を手掛けました。中央図書館には、並木宗輔が成就寺の僧侶だったことを示す文献「三原集」が所蔵されています。

並木宗輔は文楽の三大名作といわれる「菅原伝授手習鑑（すがわらでんじゅてならいかがみ）」「義経千本桜（よしつねせんぼんざくら）」「仮名手本忠臣蔵」の合作者の一人として知られています。しかし、近年の研究では、作風などの特徴から、最も中心的な役割を果たしたことが明らかになっています。

三大名作だけでなく、現在も文楽や歌舞伎で繰り返し上演され続けている演目の多くに、並木宗輔が関わった作品があります。

忠臣蔵の代表作 仮名手本忠臣蔵

今回上演される仮名手本忠臣蔵は、江戸時代前期、江戸城内で刃傷（にんじょう）事件を起こして切腹した浅野内匠頭（あさのたくみのかみ）の仇討ちのため、その家臣である大石内蔵助（おおいしくらのすけ）ら赤穂浪士が、事件の相手方である吉良上野介（きらこうずけのすけ）邸に討ち入った実際の事件をもとにしています。

この「元禄赤穂事件」は、発生直後から数々の演劇の題材として取り扱われましたが、刃傷事件から47年後、並木宗輔が作った仮名手本忠臣蔵が初演されました。同作はたちまち多くの観客を呼び、現在まで事件を元にした作品の代表的な存在となっています。

▲並木宗輔（早稲田大学図書館所蔵「忠臣蔵岡目評判」より）

写真：渡邉 肇　無断複製、転載を禁止します

インタビュー

人形浄瑠璃文楽座・三味線
鶴澤清公（つるさわせいこう）さん

今回の公演では、三原市出身の三味線奏者 鶴澤清公さんが出演します。文楽の魅力や三原への思いについて、鶴澤さんに聞きました。

―地元での初公演になります。

「故郷で公演ができることを大変うれしく思います。三原で生まれ育ち、その間、たくさんの人のお世話になりました。恩返しの意味でも、舞台の上で三味線を演奏している姿を観ていただきたいです」

―並木宗輔も三原にゆかりがありますが。

「文楽の黄金期を築いた偉大な浄瑠璃作家が、三原にゆかりがあるということに大きな縁を感じています。並木宗輔は多くの作品を残し、その多くは会場が大入り満員になるほど人気の物語です。並木宗輔がいなければ、文楽は現代まで残っていないと言っても過言ではありません」

―市民の人に文楽の魅力を伝えてください。

「古典芸能と言うと難しく聞こえますが、江戸時代の人にとって、文楽は現代のテレビドラマや映画のような庶民的な娯楽でした。太夫の声、三味線の音、人形遣いの動きは、生で観るとダイナミックで、人形や舞台装置も見ごたえがあります。まずは気軽な気持ちで楽しんで、文楽を身近に感じていただきたいです」

◀並木宗輔が若き日に修行した成就寺（本町三丁目）と、“断継”の名前で漢詩を残した「三原集」（中央図書館所蔵）

人形一体を三人で操り、繊細な動き▶や心情までも表現

三原ゆかりの浄瑠璃作家 並木宗輔「仮名手本忠臣蔵」文楽公演

と　き　29日（土）13時30分～
ところ　芸術文化センター ポポロ ホール
内　容　①早稲田大学名誉教授　内山 美樹子さんの講演②文楽「仮名手本忠臣蔵五段目、六段目」の上演
出演者　豊竹 英大夫さん（太夫）、鶴澤清介さん（三味線）、豊松 清十郎さん（人形）ほか

内山 美樹子さん

入場料　1等席3,000円、2等席1,500円
販売場所　ポポロ、うきしろロビーほか
※本公演は宝くじの助成を受けて実施しています。

仮名手本忠臣蔵ＤＶＤ上映会

公演に先立ち、五段目・六段目の導入部である三段目を内山 美樹子さんの解説付きでＤＶＤ上映します。また、公演翌日に続きの七段目を上映します。

と　き　①29日（土）11時～11時45分
②30日（日）10時～11時30分
ところ　中央図書館
定　員　各47人（申し込み先着順）
入場料　無料
申し込み先　文化観光課（☎0848・67・6014）

並木宗輔パネル展

と　き　27日（木）～30日（日）9時～18時
ところ　芸術文化センター ポポロ ホワイエ
入場料　無料
問い合わせ先　文化観光課（☎0848・67・6014）

ポポロ文楽公演記念 義太夫と忠臣蔵グッズ展

と　き　6月26日（水）～7月14日（日）9時30分～17時
ところ　歴史民俗資料館
内　容　太夫が使う見台や裃などの展示
入場料　無料

並木宗輔と忠臣蔵の書籍展

と　き　6月26日（水）～7月14日（日）9時30分～19時（土・日曜日は18時15分まで）
ところ　中央図書館
内　容　「三原集」、三大名作の浄瑠璃本などの展示
入場料　無料
問い合わせ先　中央図書館（☎0848・62・3225）

三原が生んだ孤高の画人　秦森康屯（はたもりこうとん）

三原市出身の画家 秦森康屯さんの生誕90年を記念した企画展が、6月23日(日)までリージョンプラザで開催されています。三原をこよなく愛し、絵を描くことに生涯をささげた秦森さん。本展では、油彩画をはじめ、水彩画やデッサンなど約110点と関連資料を一堂に集め、「孤高の画人」と呼ばれた秦森さんの、初期から晩年までの画業の足跡をたどっています。

三原でスケッチに明け暮れた少年時代

秦森康屯さんは大正12年、豊田郡長谷村(現:三原市小坂町)で生まれました。幼い頃から絵が好きで、少年時代は沼田川の風景などを題材にスケッチをして過ごしたそうです。

昭和11年、長谷西尋常小学校(現:沼北小学校)を卒業し、忠海中学校(現:忠海高校)に入学。そこで美術教師であり、洋画・工芸の美術団体「光風会」の会員だった戸塚 孝三郎さんに出会い、画業を志したといいます。

昭和17年、忠海中学校を卒業し、第六高等学校理乙(現:岡山大学)に合格するも、進学はせず、木原国民学校(現:木原小学校)で代用教員となりました。教師として子ども達に絵を教えながら、自身の腕を磨きました。

絵一筋に生きた孤高の画人

本格的に画家の道を歩み始めたのは、昭和18年に代用教員を辞めてからのことです。終戦後、東京や大阪で絵画の勉強を続け、昭和29年に独立美術協会展に初入選を果たしました。昭和31年には関西独立賞第一席、25周年記念賞を重ねて受賞し、一躍脚光を浴びることとなりました。

昭和33年、独立美術協会を退会するとともに、関西在住の独立展出品作家7人で「鉄鶏会」を結成し、昭和36年まで活動を続けました。やがて抽象画から具象画に転じ、欧州への取材旅行などの経験を重ねながら、風景、人物、静物などさまざまな題材を、独特の厚塗りのタッチで描きました。

その後は、いずれの団体にも属さずに、三原をはじめ、東京、大阪で開く個展のみを通じて作品を発表し続ける姿から、いつしか「孤高の画人」と呼ばれるようになりました。

美意識の底辺にある故郷三原への想い

後年は病と闘いながらの創作活動でしたが、三原へ帰省するのを楽しみにしていたそうです。秦森さんは手記の中で、三原への想いをこう書き残しています。

「放浪の末、独立展へ出品を始めた頃、故郷三原へ帰省してみた。その頃は、黒瓦の家並がまだ町全体を低く占め道も狭く、三原駅前は老松が並び情緒を示していた。旅の果で懐かしむ風物は筆影山・須波よりの佐木島、櫻山より鳥瞰する浮城城跡等、少年時代写生した風景だった。(中略)昔日のことを想っていると、わが美意識の底辺には、幼い日々過した環境が脈々と生つづけているように想はれてならない」(昭和57年、原文のまま)。

平成6年に亡くなるまで、その生涯を絵にささげながらも、故郷三原を片時も忘れなかった秦森さん。作品の中にあふれる郷土への想いを、ぜひ会場で感じてください。

参考資料
「生誕90年 秦森康屯展」(三原市 平成25年)展覧会図録

▲三人(昭和31年、沼北小学校所蔵)

▲アトリエにて(昭和47年1月)

▲佐木島(瀬戸内)(昭和57年、個人所蔵)

▲須波の港(個人所蔵)

生誕90年　秦森康屯展

と　き　23日(日)まで 10時～18時
ところ　リージョンプラザ　展示ホール
入場料　500円、大学生300円
※高校生以下と障害のある人は無料。

絵画の散歩道

ところ　市内14カ所の店舗・施設
※一部、展示が23日までの施設があります。
問い合わせ先　文化観光課(☎0848・67・6014)

「絵画の散歩道」で絵を展示している法代地（ほうだいじ） 愛子さん

本展に併せ、市内の店舗や施設で秦森康屯さんの作品を展示する、「絵画の散歩道」の取り組みが行われています。その絵の中に、力強くやっさを踊る男女の姿が描かれた一枚があります。

「まさか本当に描いていただけるとは思いませんでした」。この絵を所有する法代地 愛子さんは、当時をこう振り返ります。帰省のたびに法代地さんの店を訪れたという秦森さん。何度か会ううちに自然と言葉を交わすようになったといいます。

ある時、法代地さんが「やっさ踊りを題材にした絵を描いていただけませんか」と頼んだところ、秦森さんは「はい。いいですよ」と気軽に応じられたそうです。立ち話での口約束、まさか実現しないだろうと思っていると、一年後に電話がありました。

声の主は秦森さん。「描きあがったので、次の個展で持って行きます」。法代地さんは、「やっさ踊り」と題されたその絵を、胸を弾ませて受け取りに行ったことを、昨日のことのように思い出すそうです。

三原生まれの秦森さんが描いた三原やっさの絵。市民にとっても特別な絵には、真面目で義理堅い秦森さんのエピソードがありました。

絵画の散歩道には、他にも多数の作品が展示されています。三原の街並みとともに楽しんでください。